出が次から次に浮かんできて懐かしく思われた。

○俊徳開拓団・新潟開拓団について

昭和十九年、佳木斯鉄警俊徳分団長の野潟君から、一発で二羽の雉がとれるので撃ちにきませんかとの誘いがあり、二人で出掛けたが、雉は少なく、二羽を捕ったのみで、その後、当時私の友人が新潟開拓団にいたので訪問した。

新潟開拓団は十九年三月ごろ入植していたが、家の中は、弥栄開拓団と違い畳のかわりに筵が広げてあり、その上に布団が敷かれ、二歳ぐらいの子供を寝かしており、薪はなく萱を燃やしている有様で、朝の味噌汁の代わりに水を温め中に塩ということであり、悲惨な生活ぶりだった。

私は団の行政とは関係はなかったが、悲憤を感じ、開拓団長がどんな人か事情を聞きたいと思い、野潟君と開拓団長宅に向かったが、団長宅は不在だった。日本人として何とかすべきだと思い、その後西弥栄開拓団から味噌一樽を買い送った。

開拓団に希望を持ち入植されたのだろうし、日本では家屋敷などを売ってこちらにこられたのではないかと思い、また一年あまりで終戦になり、その生活は大変だったろうと、今だ事あるごとに脳裏に浮かぶ。

小さな赤いノートから

長崎県　東　清子

戦後五十二年の思い出、書きたいことがいっぱいある。あまりにも多くて、何から書いたらよいか一瞬戸惑う。

満州国海辺警察隊勤務で警備艦「海王」の航海長であった主人は、満州国の建国記念日（昭和九年三月一日～十日）の休暇を利用して、私との結婚式を挙げるために帰国した。三月三日式を済ませて、五日門司港から満州へ向かった。大連港に上陸し、警備艦の基地のある旅順へ向かった。

旅順－大連－営口と移り住み、華やかな楽しい生活が続いたのも束の間、大東亜戦争が昭和十六年に始ま

り、二十年の終戦まで苦しい日々が続いた。

私が大切にして引揚げのとき、リュックサックの隅に押しこんで持ち帰った、小さな赤い表紙の一冊のノートがある。その当時のことが日記として書きとめてある。五十数年の歳月を経過し、鉛筆書きの字は薄れてなかなか読めない。たどりたどり読んでいるうちに当時のことが次々に思い出されて、涙、涙、溢れ落ちる涙のため、読み続けることができないほどであった。その日記の中から少し書き出してみよう。

当時、私たち一家は、主人、私、長女（良子）九歳、甥（博昭）十二歳の四人暮らしで、満州国営口市大和区神明街という所に住んでいた。営口市は旧市街と新市街に分かれ、旧市街は中国人が多く、大きな官庁や商店も多かった。新市街は、主に日本人の住宅やデパート、病院、日本人の学校などがあった。私の住む神明街には小学校があり、満鉄の病院があり、営口神社も近くにあった。家のすぐ前に大きな公園があり、休日には、よく野球の試合なども行われていた。

昭和二十年八月十五日

正午、重大放送があるとのこと。何事ならんと、ラジオの前に一同待機する。ラジオのスイッチを入れる。君が代の曲が流れてくる。居並ぶ一同膝を正す。思いもかけぬ陛下の「忍びがたきを忍び……」と終戦のお言葉、万感胸に迫り、感無量、あふれ落ちる涙とめどなし、輝かしい、日本の歴史も終わりたる心地がする。事ここに至っては、致し方なし。陛下のお心を心とし今後を期するより道なし。

夜は、奉天からきている疎開者のことで多忙であった。その当時、私たちの隣組には、奉天からの疎開者が三十人ばかりきていた。

昨夜着いたばかりで、割り振りをしていなかったので、今日はその割り振りで大変であった。やっと割り当てをすませて落ち着いたのは、もう午後十二時近かった。

八月二十九日

「営口在住の日本人は、午後五時までに営口県外に立ち退くこと」との確報を聞いたのは、午後三時に近

かった。朝から準備はしていたものの、「まさか」という気が先にたって、なかなか手元がはかどらない。荷物をまとめ、隣組全員、悲壮な面持ちで集合、出発する。住み慣れた我が家をあとに、すべてのものを捨てて出る。その気持ち誰を恨まんか。非道な仕打ちに腹がたってたまらない。戦いに負けたのだ仕方がない。

大石橋の沿道は、人、人、荷物、荷物、中国人が荷物をひったくって逃げる。「取り返してください」と叫ぶ女の人。どうすることもできない。衣類、紙、米などが沿道いっぱいにあふれている。だれ一人拾う人もいない。

日暮れ近くなって、田んぼの中に列車がきて止まった。腰まで水につかり川を渡って乗車した。

ああ人の世の最大の悲惨事。奉天(ホウテン)―撫順(ブジュン)―蘇家屯(ソカトン)と次々に追われて、最後に落ち着いたのは安東(アントウ)であった。日本に帰れると抱いていた夢は、破れてしまった。昨日まで朝鮮の新義州に渡れたのに、今日は駄目だと言う。とうとう安東で過ごすことになった。

九月一日

私たちの団体は、営口造船、営口紡績株式会社の姉妹会社の社員家族である。主人は終戦二年前、海辺警察隊を辞めて、この営口造船に入社して終戦を迎え、この団体に入ることになった。総員九十八人の大所帯である。

宿舎は同系列の安東紡績の社宅を貸してもらうことになり、割り振りにひと悶着、こんな時節だ、お互いに譲り合いの精神を持たねば、何事も順調に進まないだろう。

私たちは、工藤さん家族、おばあちゃん、子供三人(女の子十歳、男の子六歳、男の子三歳)夫婦の計六人、真木さん家族、夫婦に男の子(十歳)の計三人、私たち計四人の三家族となった。部屋は一番広い六畳を工藤さんへ、三畳二部屋を真木さんと我々。慣れない共同生活、いろいろ苦労もあるだろうが仲良くやろうと、自分に言い聞かせる。戦争に負けたのだ。何事も我慢、我慢。

九月十九日

炊事当番で朝から支度をする。朝は粟がゆ、味噌汁、昼は無し、夜は粟飯、豚汁。量も過不足なく安心する。それぞれの班に配給する。総勢九十八人分。

向かい側の社宅の人が風呂の案内にこられ、久しぶりにゆっくり体を洗った。しみじみと人の情を知る。

おちぶれて　袖に涙のかゝるとき
　人の心の　奥ぞ知らるる

の歌を思い出した。

九月二十一日雨

朝、目が覚めたら雨。こんなところで、こんなひどい雨に遭って、余計に心細い気がしてならない。

雨のため炊事ができないので、朝は乾パンの配給であった。終日寝て過ごした。

今日の炊事当番は影山班長たちであった。この組のときは、米や野菜が人数分に足らなくて大騒ぎする。米や野菜を抜き取る人があるらしい。食べ物の恨みは何とやらで、根を持ちやすい。これも戦争に負けた現象であろう。

九月二十三日

よい天気。「天高くして馬肥ゆる」このよい季節。でも毎日、こんな惨めな生活では肥えることもできない。

夜は、中沢さんのところで数人が集まり、ごたごたがあって、中沢さんがたたかれ、けがをされ大騒ぎであった。こんな生活で、みんなの心がすさんで、常識を失っているから自粛しなければならない。中沢さんは私どもグループのお世話役。

九月二十四日

今日もよい天気、少し風が冷たくなった。少し懐の方も寂しくなったので、女物の腕時計を、訪ねてきたぼろやに「百七十円」で売ってしまった。

九月二十五日

今日は炊事当番だったので、早く起きた。用事を済ませて、主人と一緒に街まで出かける。営口での友人、中村夫妻に会う。久しぶりに話が弾み、帰りは遅くなった。

九月二十六日

どうしたのか、体中に蕁麻疹が出て、全身がかゆくて、かゆくて気持ち悪し。

九月二十七日、二十八日

蕁麻疹変わりなし、発疹消えず。

九月二十九日

紡績の社宅の診療所に診察に行き、注射をしてもらった。発疹も薄れ、気分も良くなった。

十月一日

こんな生活の中で十月を迎えた。朝の空気が冷たく、秋たけなわの感が深い。コスモスの花が、葉が、心細げに揺らいでいる。いかにも私共の心境を物語っているようだ。

十月三日

営口におれば、今日は営口神社の秋祭りだ。ああ追われる者には、神も仏もないものか。営口の空はいかに？　なにかにつけて営口が思い出される。

十月四日

午後十時ごろ、非常招集のベルが鳴った。何事ならんと飛び起きる。男子全員集合とのことであった。ソ連兵への警戒であった。

十月十三日

寒くなった。冷たい北風が吹いている。こんなふうにして、いつまで過ごすのか。いつものように今日も粟がゆをいただく。なすこともなく、ぶらぶらしているのも嫌なものだ。

昨日から、第一社宅の方に行っていた兵隊さんたちが帰ってこられ、良子は喜んで遊びにでかけ、夕食をよばれて遊んで帰る。

十月二十日

昨日炊事当番のとき、桶を洗っていて、指先にとげがささり、一晩中痛んで眠れなかった。医者に診てもらったら、指と爪の間にとげがささり、そこが化膿しているとのことで切除することになり、「痛いですか、痛いですか」と言われているうちに意識がなくなり、葡萄酒を飲まされたり、大声で名前を呼ばれたり、大変であった。

窓から見える木々の葉も色づきはじめ、秋深しの感

あり。

十月二十四日

この二、三日、また物騒なことがいろいろと続く。寒さは加わると心細くなって、夜も早く床に入る。十二時ごろ、また非常ベルに起こされた。ソ連兵の侵入であった。

安眠もできず、また、追われる身のつらさを痛感する。

十月二十八日

十月も末になり寒さがひどくなる。応召家族の末永さんの赤ちゃんが亡くなられた。幼児死亡もこれで六人目。黒木さんは、一番下の女の子を中国人に預けられた。

十月二十九日

朝、目が覚めたら、もう粥の配給が始まっていた。寒くなると朝起きるのがつらくて困る。午後から天気が良かったので、枯れ草や枯れ木を、寒さに備えようと集めはじめてみたが、なんだかあまりにも惨めに見えて、悲しくなりやめてしまった。

営口を追われて、はや二カ月以上たってしまった。また営口の空が恋しくなった。

十一月十九日

いつまでこんな生活が続くのかわからない。団体の資金もなくなったので、食事の配給も停止になった。各自が働いて、自分たちで食べることになった。

今日より餅売りに出る。あんこ入り大福餅、十円で十五個仕入れ、一個一円の売値にする。十円仕入れて五円儲けとなる。きょうは割りによく売れて、四十円もうかった。（参考のため、当時の安東の物価を記しておく。豆腐一丁四円、大根一本二円五十銭、卵一個四円、コロッケ一枚二円、米一升三十五円）

十一月二十五日

真木さんと朝早く、餅売りに出掛ける。駅でよく売れた。

餅のことを中国語では、ターゴ（打糕）と言う。「ターゴー、ターゴー」と言いながら、列車の間を売り歩く。

帰りに賽犬場に寄ってみる。競馬ならぬ競犬だ。競

争を見ていると、けんかをしてかみあっているものあり、横道にそれて外に出るもの、その辺りに寝転んでいるものいろいろで面白い。飼い主は、決勝点で懸命に犬の名を呼んでいる。券が当たって喜んでいる人に「餅を買ってください」と頼むと、「よし、全部くれ」と言われ、ほくほく顔。犬の競争を見て金儲け、これこそ「犬も歩けば、金にあたる」だろう。足も軽く帰途についた。

十二月三日

いつの間にか、十二月になってしまった。このままの状態で正月を迎えるのかと思うと、言いようのない寂しさを感じる。故国の父や母が恋しくなった。いつ帰国できるやらさっぱり分からない。

良子も餅売りに行きたいというので連れて行く。博昭さんは、安東でなく、沙河鎮（サガチン）というところに行きたいと言って、一人で出掛けた。売り上げも良かったと言って、にこにこ顔で帰ってきた。私と良子は、まあまあの成績であった。

十二月十一日

昨夜からの断水で、顔を洗うこともできない始末。水のありがたさをあらためて知らされた。

真木さんは、風邪気味で餅売りは休まれた。私、一人出掛ける。今日から、餅も十円で十三個の仕入れになり、もうけが薄くなった。もうけの多い塩あんを仕入れて売る。列車が入っていたのでよく売れて、三度も仕入れたが、もうけは割に少なかった。

十二月二十四日

今朝もよく冷えて風も冷たい。仕入れた餅も、こちこちと凍った音をたてていた。真木さん、工藤さんは寒いと言って、途中から帰られた。私は都合よく列車が来ていたので、四回も仕入れて、百六十円のもうけがあった。こんな都合の良いこともあるもんだ。頼んでおいた人参、十斤をかついで帰る。

昭和二十一年一月一日

正月。こんな時こんな所で迎える〝正月〟。なんだか正月のような気がしない。朝日を仰ぎ宮城を遥拝し、元旦の感を抱く。心のうちに日の丸を掲げて、前途へ

の希望を抱き、大いに働こうと肝に銘じた。
風もない良い天気。心ばかりの雑煮を四人で祝う。
一月十九日
今朝の寒さは格別、この冬一番と言われるほど厳しかった。餅売りに出る。並べていた餅が、かさかさして凍ってしまう。寒かったので、いつもより早く切り上げて帰ることにした。
玄関先で人だかりがしている。何事かと思うと、靴、地下足袋、洗っておいた米も鍋ごと、玄関先の電灯まで盗まれたと言って、大騒ぎしていた。子供たちが出入りして、開けっ放しでいたのだろう。用心が肝要。今の私たちには、何をとられても不自由するから。
一月二十日
紡績の社宅に八路軍が押し入り、手榴弾を投げ、その破片が佐藤さんの奥さんに当たり、腹部を貫通し亡くなられた。とんだ災難であった。ご主人は、まだ戦地から復員しておられない。敗戦のつらさをここでも感じる。
二月七日
昨日の雪もとけぬうちに、また今朝もさかんに降っている。主人と街へ味噌の買いつけに行く。先日、安東で会った友人の中村さんの紹介である。五十斤の味噌は重い。だけどこれで百円もうかると思えば、肩の痛みもがまんできる。
良子たちも紡績の第一社宅の方に餅売りに行って、四十円もうかったと、喜んで帰ってきた。良子と博昭さんの会話、「一ぺん餅を腹いっぱい食べたい」「もうけの分を食べようか」「うん、食べよう」。
三月三日
桃の節句、心ばかりのお祝いをしたい。少し稼いでこなければと街に出たが、天候が悪くなり、なかなか売れないので早く帰った。
また宿舎を替わる話が出て、落ち着かない。二六九号へ行くようにとのことで、荷物をまとめていたら、二五六号へ替えられたり、ぐらぐらして困ってしまう。本部の何かの都合だろうから、文句を言わずに従うことにしよう。落ち着いて、片付けも済んで床に就いた

のは、十二時に近かった。神に感謝。

四月二十九日

天長節なのに、日の丸の旗一つ見えない。中国の四八烈士の慰霊祭とかで、青天白日旗で街は満ちあふれていた。

ああ、戦争に負けるほど惨めなものはない。「忘れまいぞ、いつの日にか！」と、心に固く誓った。

五月十三日

雨模様であったので、餅売りは休む。昼ごろ「竹岩さんが、作業中、仕事場の梁から落ちて肋骨を折られた」と言って、富田さんたちが担いでこられた。

けがは、いつするか分からない。用心が肝要だ。

五月十七日

朝から曇っていたが、とうとう雨が降り出したので、私は餅売りを休んだ。良子と博昭さんが出かけたが、雨に濡れて帰ってきた。

一、六〇号の岩渕さんの奥さんが、大豆や米の注文を取りにこられた。奥さんはつい最近、脳梗塞で半身不随になり、言語も不自由になられた。そのまわらぬ口で、いろいろと話された。話の中に「東さん、時代とともに歩むより、道はありませんね」とおっしゃった。よい言葉が私の胸を突いた。気の毒になって、お米を三升ばかり注文した。

五月十八日

主人が、明日の日曜日が今日に繰り上げて休みだから、良子の誕生祝いも今日しようと言うので、早速、六道溝まで買い物に出かけた。こんな生活の中では、思うようにできないが、肉を買ったり、魚を買ったり、果物なども買いこんでお祝いをする。ちょうど十歳の誕生日であった。良子は大変喜んだ。良子ばんざい。よい子になーれ。

五月二十一日

街も初夏の気分横溢(おういつ)。若葉、若葉、街には新鮮な野菜、果物、魚が店にあふれていた。「目に青葉　山ほととぎす　初鰹」。買えない。見るだけ。

五月二十五日

先日、ふとしたことから中国の医者湯氏（日本の京都大学の医学部卒業）の家を訪れた。夫人も第一夫人、

第二夫人と、二人の夫人がおられるが、いつも一緒で、とても仲がよい。とてもよい方で私に、「餅など売らないで、うちにきて手伝ってください」と言われた。ミシンで子供の服を縫ったり、中学一年の子供に英語を教えたり。「ジス　イズ　ア　デスク」「これは机です」まではよいが、これを中国語になおさねばならない。これ、これと机をたたいたり、大奮闘。「学校はどこでたのかしら、東京かな」とひとり合点。帰りには、百円とじゃがいもや玉ねぎをもらって帰った。時々訪ねると、お節句のちまきや、ゆでたとうもろこしなどいただくこともあった。引揚げの挨拶に行って餞別をいただいた。

六月十五日

下の紡績の社宅で、今日から学校が始まるというので、良子たちも大喜びで通学する。机も椅子もない、破れたガラス戸の中での勉強。元気で立派に育って、日本の将来を担ってほしい。

六月二十一日

今日も暑い日であった。そろそろ引揚げの話も聞かれるようになった。荷物の整理や片付けにとりかかる。暑い日差しの中を、主人たちは、二、三人連れ立って、安東の街に、いろんな情報の収集に出て行かれた。夕方近く帰ってこられたが、服は破れ顔や手足は傷だらけ。どうされたのか尋ねると、四、五人の中国人に取り囲まれ、何やかやと言いがかりをつけられて、殴る、蹴るの暴行を繰り返され、ズボンのポケットに入れていた財布も盗られたと言って、三人とも、ほうほうの態で帰ってこられたのであった。

またまた敗戦のみじめさを味わった。命のあることが何よりと神に感謝する。治安の悪さに驚く。

六月二十六日

いよいよ引揚げの話が本格的になってきた。しかし、壺蘆島収容所まで安東からは大変なので、歩くことに自信のある者、足手まといの家族のいないこと、病人でないこと、途中不慮の事故の責任は負わないなど、条件が出された。家族で検討を重ねる。良子も博昭さんも「元気にがんばる」と返事をしてくれた。とにかく引揚げの第一陣に加わることにした。残る人々から、

内地連絡を頼まれ、親や兄弟の住所も控えておく。荷物も最小限度にとどめる。主人（四十二歳）、良子（十歳）、博昭（十三歳）、私清子（三十六歳）。無事内地帰還できることを神に祈る。

七月八日、いよいよ出発の日、社宅の残留の方々と手を握りあい、涙を流して別れを惜しんだ。安東を出てしばらく、本渓湖（ホンケイコ）日僑俘管理所というところに止められた。検疫のため、発疹チブス、腸チブス、コレラの予防注射を受け、頭からＤＤＴの白い粉をふりかけられ、目も口も開けられたものではなかった。ここに一週間ぐらい止められた。それから、壺蘆島に向け、夜に昼をついで山中を歩いた。喉が渇いてたまらないので、足元の川の泥水をがぶりと飲む。今に思えばよくも病気にかからなかったものだと感心する。

何度も中国人の集団に襲われ、時計や貴金属、現金をとられた。

列車がきたので、喜んで乗りこんだら石炭を積んだ無蓋車輌で、石炭の粉であたりは真っ黒け。雨が降ると顔や手足に付着してとれない。明かりをつけると標的にされるというので、真っ暗な闇の中、赤ん坊が泣きだす。小さな子が騒ぎだす。夜が明けたら抱かれていた赤ん坊が冷たくなって死んでいたという、悲惨なこともあった。

壺蘆島の収容所に着いたのは、七月二十日の夕方であった。

収容所の生活は厳しかった。空倉庫のようなところで夜は寝るのだが、小石のゴロゴロしている土の上に、大風呂敷を広げて、四人並んで寝る。体のあちこちが痛む。

やっと、アメリカから貸与された、ＬＳＴという輸送船に乗り込んで引き揚げることになった。雨が降ったりチフス患者が出たりして、最悪の状態になり、隔離されたりして、一週間以上も乗船が遅れてしまった。

船中で人が亡くなり、水葬をして弔う。海中に遺体を投げ入れ、そのまわりを船が三旋回してボーと汽笛を鳴らし、弔意を表し去って行く。今もその様子が頭からはなれない。船中の食事は粗末なもので、高粱のおかゆ、海水のような澄まし汁、昼は乾パン、夜は麦

めし、野菜のごった煮。夜になると甲板に寝転んで、きれいな星空を仰ぎながら、良子が「お母さん、食べ物の話をしよう」と毎晩いろいろな食べ物の話をするのが、楽しみのひとつ。おひな様に食べた「おすし」、お誕生日に食べた「ケーキ」、お父さんと三人でピクニックに出かけたときの「おにぎり」。つぎつぎときりがない。上陸して一番に食べたいものは「白いご飯に鯛の塩焼き」だそうだ。

博多の港が見えたのに、なかなか上陸できないもどかしさ。消毒や注射で手間取った。

上陸できたのは、七月三十一日の午前十時ごろであった。厚生省博多引揚援護局で、「引揚証明書」をもらって、所持金を新円に換えてもらった。一人千円で、四人で四千円、余分は一緒の引揚者でお金のない方に差し上げたりした。

博多のやみ市で、良子に「白いご飯と鯛の塩焼き」を食べさせた。親馬鹿ぶりを発揮する。良子の満足した顔が今も忘れられない。

熊本行きの列車に乗り込む。大勢の人が先を争って、押し合いへし合いなかなか乗れない。主人が良子を窓から押し込んだ。やっと全員乗り込んで、やれやれと落ち着いたと思ったら、次の駅で乗り込んだ人が、座っている良子の頭の上に重なってきた。「ここには子供がおります」と大声でどなり男の人をはねのけた。電気もなく、列車の中は真っ暗、今から思えば想像もつかない。

熊本の母の家に着いたのは、八月一日の午前五時であった。玄関に立ったとき、出てきた母は私に抱きつくなり、泣きだしてしまった。刈りあげて男装していた髪が、ボサボサに伸びていた。四人とも汗とほこりにまみれたぼろぼろの服を着て、まるで浮浪者そっくりであったろう。よくも生きて帰ったものだと思う。二、三日休養して主人の故郷の菊池へ。

引揚げのとき肌身離さず持ち帰った、小さな赤いノート（縦七㎝×横十㎝）。昭和二十年八月十五日から始まり昭和二十一年七月二日で終わっている。何一つ持って帰らなかった。ほんとうに裸同然であった。今八十八歳になって、この赤いノートが私の宝物だ。固く握

り締めた。
五十二年の歳月をかみしめ、人類の恒久平和を祈り続けたい。

遼東哀史

長崎県　原　雅子

昭和初期、長野県出身の父と埼玉県出身の母は、当時の国策に沿って渡満しました。旅順で生まれた私が物心つくころ、一家は大連に移りました。大連の市街は、帝政ロシアが粋を凝らした豪華な建物や、大きなデパートが立ち並び、幼心にも大都市でした。高度な生活水準の地にあって、両親からの愛情と期待を一身に集め、絵にかいたような幸せな日々を過ごしていました。

大陸での戦域が拡大され、ついに昭和十六年太平洋戦争に突入しました。

緒戦の戦果に、国民は戦勝気分に酔っておりましたが、やがて親子三人の行く手には、言語に絶する悲劇が続発したのです。母の急逝、旅順への転居、旅順から徒歩による大連への逃避、引揚げ当日の父との別離、孤児となり佐世保に上陸、その後の苦難……。

奈落での過酷な運命を私個人の泣き言にとどめず、戦争が引き金となった一家の悲劇を史実として、平和の尊さを後世に語りつがねばならない。私にできる親孝行、それは、無念の死を遂げた両親の思いを受けて、平和を祈念することなのです。

小学校入学のころまでは優雅な暮らしをしておりましたが、太平洋戦争が勃発し、小学校が「国民学校」と改称されたころからは、大連の巷にも戦雲が垂れ込めていました。灯火管制、防空訓練、防空壕、金属供出等々。

年若い母は、国防婦人会の役員に推され、絣のモンペに割烹着姿で婦人会や隣組など公務に準ずる仕事をしていました。どんなに苦しいことがあっても、家庭ではいつも朗らかで、「ハァー　またも雪空　夜風の